

P2-358 4D-STIC with inversion mode を用いた胎児大血管の走行の評価香川大¹, 香川県立保健医療大看護学科²森 信博¹, 野口純子², 花岡有為子¹, 金西賢治¹, 山城千珠¹, 田中宏和¹, 塩田敦子¹, 柳原敏宏¹, 秦 利之¹

【目的】4D-STIC with inversion mode を用い、胎児大血管を描出することを目的とした。【方法】妊娠16-37週の正常胎児13例、および先天性心疾患をもった胎児7例(両大血管右室起始症1例、ファロー四徴症1例、大血管転移症1例、肺動脈低形成を伴った心室中隔欠損症1例、左心低形成症候群3例)を対象とした。4D-STIC with inversion mode を用い、胎児大血管の走行の評価を行った。【成績】すべての胎児で大血管の走行を同定することが可能であった。正常胎児では肺動脈が大動脈の前方を走行する様子を明瞭に描出することができた。両大血管右室起始症では右心室から肺動脈と大動脈が平行に走行する様子が鮮明に描出された。ファロー四徴症と心室中隔欠損症では細い肺動脈を描出することができた。大血管転移症では両大血管が平行して走行する様子を描出できた。左心低形成症候群では細い大動脈が明瞭に同定できた。【結論】4D-STIC with inversion mode は胎児大血管の走行を評価する有用な診断法であることが明らかとなった。

P2-359 当院において診断された先天性心疾患145症例～心臓以外の奇形・染色体異常との関連について～

大阪府立母子保健総合医療センター

米田佳代, 嶋田真弓, 川口晴菜, 岸本聡子, 中山聡一郎, 清水彰子, 倉橋克典, 林 周作, 岡本陽子, 光田信明

【目的】先天性心疾患(CHD: Congenital Heart Disease)は心臓以外の奇形(ECA: Extracardiac lesion)や染色体異常(CA: Chromosomal abnormality)を合併する頻度が高いことが知られているが、その頻度は報告によって異なっている。今回の検討では、当院にて出生前診断されたCHD症例のECA, CA合併率を明らかにすることを目的とした。【方法】2005年1月～2009年7月に当院にて出生前診断されたCHD症例145例を対象とし、ECA, CAの合併率を後方視的に検討した。今回の検討ではECAを外科的・内科的もしくは大きな美容的問題となる先天性疾患と定義した。また当院では羊水染色体検査は結果によって周産期管理が変更される可能性のある症例に限って行っている。【成績】出生前診断されたCHDは145例を占め、それらは両大血管右室起始症(DORV)31例・ファロー四徴症(TOF)18例・左室低形成(HLHS)14例・単心室(SV)13例・心室中隔欠損症(VSD)17例・大血管転位症(TGA)6例・大動脈縮窄症(CoA)6例・三尖弁異形成6例・その他であった。このうち、CAを合併したのは44例(30%)・ECAを合併したのは45例(31%)であった。ECA合併した45例中、30例(67%)にCA合併を認めた。CA合併率が高かったのは、DORV:55%・TOF:61%・ECD:75%・VSD:47%であった。逆に低かったのは、SV:8%・TGA:0%であった。また羊水染色体検査を行った症例は37例(25.5%)、そのうちCAであったのは25例(55.6%)であった。【結論】今回の検討ではCHDにおいてCA合併が多く、特に、DORV・TOF・ECD・VSDで認められた。またCHDにECAを合併した場合、CA合併が高率に認められることがこの検討においても明らかとなった。

P2-360 胎内診断された胎児心疾患の周産期管理についての検討国立循環器病センター¹, 大分大地域医療産婦人科²加藤壮介¹, 根木玲子¹, 井出哲弥¹, 岩宮 正¹, 玉田 将¹, 菅 幸恵¹, 神谷千津子¹, 上田恵子¹, 桂木真司¹, 山中 薫¹, 吉松 淳², 池田智明¹

【目的】近年、超音波技術の向上に伴い、心疾患の胎内診断がなされる機会が増えつつあるが診断後の管理方針についての検討は少ない。今回、我々は胎内診断された児の転帰を後方視的に解析し、胎内診断の有用性について検討した。【方法】1998年から2007年の10年間に、当院で胎内診断がなされた心疾患200例を対象とし、児の娩出方法、分娩週数、出生体重、胎児水腫の有無、胎児治療、胎内死亡、人工妊娠中絶、染色体異常、早期新生児の治療および早期新生児死亡例、ductal shockの有無について検討した。【成績】平均分娩週数は37.5週、平均出生体重は2644gであった。分娩方式として胎児適応による帝王切開が29例であった。胎児水腫発症21例、胎児治療2例、胎児死亡6例、人工妊娠中絶9例、染色体異常17例であった。出生後早期より呼吸管理、心拍数管理、およびカテーテル治療を行ったものは5例あり、いずれも出生前に予測可能であった。早期新生児死亡に至った症例は12例あったが出生後早期のductal shockによる死亡例は認めなかった。【結論】胎内診断がかった症例は新生児期の循環管理がスムーズに行われ、特にductal shockに落とし込むことなく管理できるという利点があった。当報告から、さらに多くの胎児心臓病の診断が必要であると考えられた。